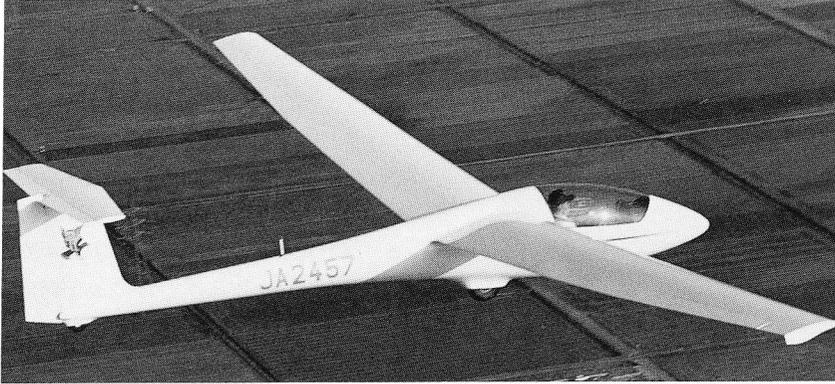


うちの機体

ASK-23型 ^{しょうらん} “翔鸞” JA2457 —立命館大学—

立命館大学昭和44年卒 みつばやし たつお



「翔鸞だって」そんなの聞いてないよ。昨日学生から電話で聞いた名前とちがっているじゃないか。だれが名付け親なのかわからない。確かに京都に翔鸞学区っていう所はあるけれど。

これは学生の陰謀にちがいないと、のっけから良からぬ思いが身体中を駆け巡る。平成3年6月2日、場所は立命館衣笠体育館。多数の関係者が見えている。命名式である。「まっいいか」学生が自分達のことだと思っている。気迫が伝わってくる。それでいいんだよそれを待っていたんだ。それに圧倒され関係者の挨拶に迫力がない。「50周年に機体を買おうよ」全国のトップを走って来た立命がいつの間にか一番後ろにいる。自分の事しか考えなかった我々OBの責任である。学生あつてのOB会であると思う。技量を上げながら機体を買う即ち金銭的負担を学生にかけない。みんなが合意した。心の中でASK23だと決めながらコーチ先輩の意見を調節する。学生が飛んで機体から降りた時の嬉しそうな顔、その数が多いほど俺は幸福なんだ。それだけでやっているんだからさー」「ASW24だよ、頼めばすぐにも買えるよ」「デイスカスは信頼できるよ」先輩コーチの意見は重

い、気も重い、重いものは飛ばないのである。平身低頭しながら全国のOBに資金援助を頼んだ。

4回生がどなり込んで来た「本当に買う気があるのですか、話があってから2年になります。下級生を抑えられません」相当な覚悟である。本気である。学生と共にコンピュータ付きで契約した。

「学校が金を出さないだって？許可があったから契約したのに」。「松岡、富山両先輩、学校と掛け合ってください」。「だまって買いやがっても信用出来ねえ、教官に行ってやらねえから」。稲森教官からさんざん油をしぼられた。「式次第に俺の挨拶がないじゃないか、いやいや主役は学生なんだ」。

JA2457は1991年2月17日木曾川におけるテストフライト、学生中野幹生1時間46分、関知雅2時間04分の飛行が日誌に記録された。そのまま全国大会へ、中野君10位、十分優勝できる実力があるのに……

松山健史の優勝まで三好勝也の3位を経て3年待たねばならなかった。以下をもって閉式の辞としますの聲に我に帰った俺の耳元でだれかが囁いた。「次の新機体は何にしますか」。